

---

# 十色なトイキ

yoshina

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十色なトイキ

### 【Nコード】

N3302E

### 【作者名】

yoshina

### 【あらすじ】

色んな仕事に関わる色んな人を、若干常識を外れつつ軽い感じで描いていく千字前後の短編集。

## 1、パーフェクトナース

都心部にそれなりの規模を持って建つ土戸茂病院に、最近新しい看護師がやって来た。

名前は佐伯チヒロ。二十八歳。外科所属。とても明るく陽気な人なので、患者達の間で人気だった。

「はい、おじいちゃん、あーんして」

チヒロがご飯をスプーンで掬って口元へ寄らせてやると、初老の患者はニコニコしながらそれを食べる。

「すまないねえチヒロちゃん。忙しいだろうにこんなこと頼んでしまつて」

「いいのよお。奥さんが風邪で来れないんだもの。仕方ないわ」

申し訳ないと言いつつも、男性はどこか上機嫌だ。

同室の患者達も羨ましそうに見つめている。

「両腕骨折で最悪だと思ったけど、チヒロちゃんにこんなことをしてもらえるなら、折った甲斐があったってものだよ」

「やだ、おじいちゃんったらあ！」

キャピキャピ笑いながら、チヒロはその背中を軽くパシッと叩く。腰をくねらせても、健康的な肌をしているのでいやらしくは見えない。

そして、綺麗に磨かれた爪を持つ人差し指を目の前にかざし、悪戯っ子をたしなめるように「めっ」と睨んだ。

顔を近づけるので、スカートから垣間見える、弾力のありそうな

太もものラインが余計に露わになる。

「もー、そんな他の女に色目使っちゃだめじゃなあい。奥さん今風邪なんでしょ？」

「ははは、すまんすまん」

「それ以上言ったら別のお注射しちゃうからねー？」

「おやおや、それは参ったね」

傍から見れば、ある意味微笑ましい光景。

だが、薄ピンクのルージュが引かれた唇から飛び出た「別のお注射」という言葉で、背筋が寒くなった同室の患者がいなかったわけでもない。

別段驚くことも無く返事をする初老の患者を目にして、賞賛の視線を送る患者もいる。

そう、なぜなら――

「そういえばチヒロちゃん。さっきから気付いてたんだが、今日ヒゲ剃り忘れてないかい」

「うっそ、マジで!？」

慌てて手鏡を取り出して確認するチヒロ。

”彼”の口元には、青い粒みたいなのが若干浮かび上がっている。

夜勤明けで剃るのを忘れていたようだ。

羞恥心を隠すように、思わず文句を言ってしまう。

「もー、早く言ってよっ」

「ごめんごめん、女性にそんなこと言うのは気が引けてね」

だが、初老の男性はさらりとフォローの言葉を口にする。

同室の誰かが「年の功だ」とボソリと呟いた。

「あら、嬉しいこと言ってくれるじゃない。っじゃなくて、早く剃りにいかなくちゃ」

「あ、髭剃り貸そうかい？」

心は女。外見も女。（それなりに）

でも性別的には男なチヒロ。

たくましい腕で患者を介護し、色っぽい笑顔で心を癒す彼は、ある意味完璧なナースである。

「いいのよー、ロッカーに予備が置いてあるからあ」

そんな彼は、ため息をつきつつ今日も元気にスカート姿で髭を剃っている。

## 2、星と煙とヤンキーと

深夜のインターチェンジでトラックにもたれつつ一服していると、ケータイの着信音が鳴った。

鈴子は真っ赤なケータイを慣れた手つきで開ける。

画面には「翔太」の文字。

『お誕生日おめでとう。あした帰ったらいっしょにケーキが食べたいな』

その内容に彼女は思わず嘖き出す。

「まったく。祝ってもらってるのやら、ケーキをせびられているのやら……」

だが、嬉しいことには違いない。

誕生日を覚えてはいたが、まさかちゃんと二十四時きっかりにメールが来るとは思っていなかった。

こんなパツキンヘビースモーカー年増女へ、律儀に誕生日メールを送るのは翔太くらいだろう。

鈴子は緩む頬を隠さず、画面を見つめる。

「あれ、鈴姉さん。何にやけてんすか。　なんか良いことでも？」

画面の控えめな明かりに映される彼女の横顔に、顔なじみの若いドライバーから声をかけられる。

いつも彼女はクールに淡々と運転をしているイメージしか無かったので、今の表情は彼にとって珍しく見えたようだ。

「ああ、まあね。今日誕生日でさ」

「そりゃおめでとうございます！　じゃあ、そのケータイには、男からのハピバメールとか？」

「そうだよ。ぴっちぴちのわかい男からね」

「へー、鈴姉さんもやりますねえ」

笑いながら男もタバコをジューパンのポケットから取り出す。

そして一本つまみ出すと、鈴子の目の前に差し出した。

「じゃあ俺からはこれを」

「一本なんてケチくさいねえ」

「いやー、最近タバコ高いんで勘弁っす」

「冗談だよ。ありがたくもらうよ」

丁度吸っていたタバコがほぼ灰になりかけていたので、そのまま受け取ったほうを咥える。

それに合わせ、男はライターに火をつけ、彼女のタバコに点してやった。

遠慮なく火を貰う彼女の隣に立って、男も一本咥える。

二人でふかしながら、黒い空に煙を吐く。

暫く苦味を味わうだけの時間が流れる。

だが沈黙は長くは無かった。

男が彼女のほうに不意に向き、質問をする。

「で、どんな男なんすか？　あの鈴姉さんを落とした男って」

さっきからずっと気になってたらしい。

案外真顔で聞かれるので、鈴子は笑う。

「そりゃあ良い男には違いないだろうねえ」

「そんな言い方されたら、ますます気になりますよ」

あいまいな表現に、男は口を突き出す。

「ははは、まあいいじゃないか。それより、あんたのほうはどうなんだい。風のうわさで”スゴイ彼女”が出来たって聞いたよ」

鈴子自身よく知らなかったが、同業の知り合いからこの男に最近スゴイ女が出来たと聞かされていた。

どういう風にスゴイのかは、「本人に聞いたほうが面白い」と言われていたのだが。

その本人は、反撃の質問に思わずむせる。

「もうそんな噂流れてるんすか。参ったな」

「ワケありかい？」

「まあ、あるっちゃーあるような、無い様なー……」

言葉を濁すその態度に彼女は「そうかい」とだけ返す。

追及する気は無いようだ。

そのままこの話は無かったことにするような空気が流れたが、当の男が口を開いた。

鈴子の気遣いで、逆に心境の変化が出たのか。

「こっちも、良い女っすよ。看護師だし、俺よりがんばってるし」  
「へえ」

その後も取り留めの無い会話を交わし、二人はあっさりした挨拶でそれぞれのトラックに乗り込んだ。

別々の方向へ走り去っていく。

車中、鈴子は助手席に置きっ放しだった替えのタバコを掴もうと



する。

しかし、箱の側に置いてあるケータイが目に入り、手を止めた。そして息を吐く。

まだのどに残っていた煙を、全て出し切るような深い息だ。

「年もまた取ったことだし、ちょっと減らしとくか……」

メールの送信者を思い出し、彼女は意を決したようにペダルをより強く踏み込む。

息子の翔太が小学校に行く、その登校までに帰るために。

もちろん、ケーキも買っておく時間も考えて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3302e/>

---

十色なトイキ

2010年10月17日06時23分発行